

ボリス・パステルナーク

ドクトル・ジバゴ

江川卓訳

I

ボリス・パステルナーク

ドクトル・ジバゴ

江川卓訳

I

ドクトル・ジバゴ 第Ⅰ部

定価1500円

昭和55年3月15日初版

著者 ボリス・パステルナーク

訳者 江川 卓

発行者 岡田 舜平

発行所 株式会社 時事通信社

東京都千代田区日比谷公園1-3 〒100

電話 東京03(591)1111(大代表) 振替 東京4-85000

印刷所 株式会社 太平印刷社

東京都品川区東品川1-6-16

© 1980 TAKU EGAWA

(落丁乱丁はお取り替えいたします)

ドクトル・ジバゴ 第I部 目次

第1編 五時の急行 3

第2編 別世界の少女 33

第3編 スヴェンチスキー家のヨールカ祭 101

第4編 迫りくる運命 147

第5編 過去との訣別 209

第6編 露営地モスクワ 263

第7編 旅路 336

人名のシンボリカ（注解I） 409

口 絵

ヨーロッパ・ロシヤ鉄道図、モスクワ街路図（一九〇〇年当時）

第Ⅱ部 目次

第8編 到着

第9編 ワルイキノ

第10編 街道にて

第11編 森の軍団

第12編 雪中のななかまど

第13編 女人像館の向い

第14編 ふたたびワルイキノにて

第15編 終幕

第16編 エピローグ

第17編 ユーリイ・ジバゴの詩編

地名、その他のシンボリカ（注解Ⅱ）

訳者あとがき

装幀 岸 千秋

ドクトル・ジバゴ

第I部

第1編 五時の急行

1

歩みゆき、練りゆくままに、『永遠の記憶』^{*}がうたわれた。歌声がやんでも、人びとの足が、馬たちが、吹く風が、その歌の変りないリズムをうたいつぐように思われた。

道行く人は足をとめて葬列を見送り、花輪の数をかぞえ、十字を切った。もの好きたちが行列にまぎれこんできて、たずねた。「どなたのお葬式ですか？」——「ジバゴさんですよ」と答えが返る。

「なるほどね、それならわかる」——「いえ、ご主人じゃない。奥さまの」——「どちらにしてもね。天国に安らわせたまえ。立派なお葬式ですな」

とり戻すすべもない、この世の生命の最後の数刻があわただしくうつろい過ぎた。『主のものなり、地と地に充つるもの、この世に生きとし生けるもの』^{***}司祭は十字を切る形でマリヤ・ニコラーエヴナの遺体に一つかみの土を投じた。『心義しき者の魂』^{***}がうたわれた。すさまじい投げ合いがはじまった。棺の蓋が閉じられ、釘が打たれ、土中におろされた。四挺の鋤でせわしなく墓穴に投げこまれる

土くれが、ひとしきり雨音を高くひびかせた。墓の上に土饅頭^{まんじゅう}ができた。その上に十歳ばかりの少年がのぼった。

大きな葬儀の終り近くにふと訪れがちな、しびれたような無感覚の状態のせいなのだろう、なぜかその少年の姿は、母の墓の上で追悼の言葉を述べようとしているもののように見えた。

少年は顔をあげて、その小山の上から、荒涼とした秋の原野と修道院の円屋根に、見るともない視線を走らせた。少年の獅子鼻の顔がひきゆがんだ。首が長く突き出された。もし狼の仔がそんなしぐさできっと頭を起したのだったら、当然、すぐにも吼え声が聞えただろう。だが少年は、顔を両手でおおって泣きじゃくりはじめた。空を流れてきた雲が、少年の両手と顔に、冷たい秋雨の鞭を浴びせた。ぴったりとした袖口に襷飾^{たすきかざり}りをつけた黒衣の人物が、墓のほうへ歩み寄った。故人の弟で、泣いている少年の叔父にあたる人、自身の希望で僧籍を離れた元司祭ニコライ・ニコラーエヴィチ・ヴェデニャーピンである。少年に近寄り、叔父は少年を墓地から連れ去った。

2

昔のよしみで叔父にあてがわれた修道院の一室で、二人は一夜を明かした。ポクロフ祭^{ポクロフ祭}の前夜のことであった。次の日、少年と叔父ははるか南方、沿ヴォルガ地方の一県市に旅立つことになっていた。ニコライ叔父はそこで、進歩派の地方新聞を発行する出版社に勤めていた。汽車の切符も買っていたし、荷物もまとめられて、庵室に置いてある。近在の駅から、機関車の入替え作業のもの悲しい号笛が、風に乗って遠く運ばれてきた。

夕刻からきびしく冷えこんだ。地面の高さにある庵室の二つの窓からは、金雀花〔和名むれ〕の灌木に囲まれた見ばえのしない菜園の一角と、往来のどこどこに見える氷の張った水たまりと、昼間、マリヤ・ニコラーエヴナの埋葬が行われた墓地のはずれとが見わたされた。菜園には、霜枯れて青みをおびたキャベツが、モール刺繡のように幾畝かつらなっているばかりで、殺風景にがらんとしていた。強風が吹きつけると、葉の落ちた金雀花の灌木は、魔に憑かれたもののようにはげしく体をふるわせて、道に倒れ伏した。

深夜、ユーラは窓を叩く音で目をさまされた。明滅する白い光に、暗い庵室がこの世ならず明るく照し出されていた。下着一枚でユーラは窓ぎわに駆け寄り、冷たいガラスに顔を押し当てた。

窓の外には、街道もなく、墓地もなく、菜園もなかった。戸外ははげしい吹雪で、大気は雪に煙っていた。もしかすると、雪風がユーラに目をつけ、自分の恐ろしさを思い知らせてやろうと、少年に与える効果のほどをことさら楽しんでいたのかもしれない。嵐は吼えたけり、うそぶき、あらゆる手

* ロシヤの葬送の歌。死者の記憶が永遠にもちつたえられることを祈る歌で、この言葉は司祭の口からも唱えられる。なお、たんに個人的ばかりでなく、広く歴史的な意味で「永遠の記憶」という言葉は全編の主要テーマを暗示している。

* 埋葬にあたって司祭はこの言葉を唱えながら、手ですくった一つかみの土で故人の胸に十字の形を描く。死者が土に還ることの象徴である。教会スラヴ語訳旧約聖書「詩篇」二三歌一節（日本語訳二四歌）の言葉。

*** 棺をおろすときの歌。「心義しき者の魂とともに、汝の魂も救世主のもとで安らぎを得んことを」とつづく。

*** 旧暦十月一日の聖母祭。聖母の衣に覆われてビザンチン教会の危機が救われた故事にもとづき、正教教会で祝日とされた。「ボクロフ」は「覆い」の意味で、この日はロシヤでは雪がはじめて大地を覆う日ともされている。

だてをつくしてユーラの注意を惹きつけようと懸命であった。空からは一反、また一反と、白い布地が際限もなく地上に落ちかかり、大地を経帷子きょうかひらで覆つていった。吹雪だけがこの世界を圧し、あえて張り合おうとするものとなかった。

窓敷居から降りたユーラは、一瞬、すぐにも服を着て、戸外へとび出し、何かを始めなければという衝動にとらえられた。少年をおびえさせたのは、修道院のキャベツが雪に埋もれてもう掘り出せなくなるのではないか、愛するママが原野の雪にすっぽりと覆われて、もう逆らう力もないまま、地中のもっともつと深いところへ、自分の手のとどこぬ遠いところへ行ってしまうのではないか、という思いであつた。

今度もまた涙の幕ぎれとなつた。目をさました叔父は、キリストの話をしてやって少年の心をなぐさめ、それから、あくびをしながら窓ぎわに歩み寄つて、しばし物思いにふけた。二人は着替えにかかった。夜が白みはじめた。

3

母が存命していたころのユーラは、父親がとうに一家を見捨てて、シベリアの町々や外国を旅して歩き、道楽に身をもちくずしていることも、また、何百万という一家の資産を、とうにあとかたもなく蕩尽してしまったことも、知らされていなかった。ユーラはいつも、父親はペテルブルグにいるとか、どこかの定期市、たいていはイルビートの定期市*に行つてるとか聞かされていた。

その後、いつも病気がちであつた母親が肺病と診断された。母親はフランスや北イタリアへ転地療

養に出かけるようになり、ユーラは二度ほど母に同行した。そんなわけで、ユーラの幼年時代は、いかにもまとまりのない、たえず謎に包まれたもので、おおかたは他人の手にあずけられていることが多く、しかもその他人がしょっちゅう入れ替った。やがてユーラはこの入れ替りに慣れ、無秩序の連続もいつか日常となつて、父親の不在をいぶかしく思うこともなくなつてしまつた。

ほんの幼い子供心に、彼は実にさまざまなのが、まだ自分の姓を冠して呼ばれていた時代を記憶していた。

ジバゴ織物工場があり、ジバゴ銀行があり、ジバゴ・アパートがあり、ジバゴふうのネクタイの結び方、ピンの留め方があり、ラム入りパンに似た感じの丸型の甘い饅頭^{ドーナツ}までが、ジバゴの名で呼ばれていた。ひところはモスクワで辻馬車の馭者に『ジバゴ邸へ！』と一声かければ、これはもう『悪魔のお宿へ！』^{「どこか遠いところの意味もある」}と言つたのと同じことで、馭者は得たりとばかり、この世ならぬ地の涯までもと、轡^{そり}を走らせてくれたものだ。手入れの届いた静かな森林が、やがてきみを囲む。しなだれた樅^{もみ}の枝に鴉がとまって、はらはらと樹水を落す。大枝のはぜる音のように、鴉の啼き声がするどくあたり^{あたり}にこだまする。林道をへだてた新築の建物のあたりから、純血種の獵犬の群が道を横切つて駆けぬける。やがて家々に灯がともる。夕闇があたりを包む。

ふいにこの一切があとかたもなく消え去つた。一家は零落した。

* ウラルのベルミ県の町。十七世紀以来二月一日から三月一日まで大規模な定期市の立つことで有名。定期市は欧亜両地域の交易場の觀を呈し、毛皮の取引が盛んだつた。

一九〇三年の夏、一望の畑地に二頭立ての旅行馬車トラベリングカを駆って、ユーラと叔父は洞ヶ窪ドウケツカへ向つていた。絹糸工場主で芸術界のバトロンとして知られたコログリーンヴォフの領地であるこの土地に、二人は教育学者で啓蒙活動家のイワン・イワーノヴィチ・ヴォスコボイニコフを訪ねようとしていた。

カザン聖母祭、穫入れもたけなわの頃にあたつていた。昼食どきのせいかな、祭の日であるためか、畑には人っ子ひとり見当らなかつた。頭半分を剃られた囚人の後頭部のような刈り残しの畑に、焼きつけるような太陽が輝いていた。頭上で鳥が輪を描いていた。重たげな穂をつけた小麦は、まったくの無風状態の中でぴんと背を伸ばし、かと思えば、街道から遠く離れたあたりに小高い山をつくつて積みあげられていた。長いこと目をこらしていると、それらの小山はまるで動いているかのように錯覚され、はるかな地平線上を測量技師たちが歩きまわつて、なにごとか記録にとどめているようにも思われた。

「なにかね」ニコライ叔父がパーヴェルにたずねた。出版社の雑役夫兼守衛であるパーヴェルは、馭者台に横向きに坐り、背をまるめて、足を大きく組んでいたが、これは自分の本職が馬丁ではないこと、馬車を御するのは自分の柄ではないことを見せつけようという姿勢だった。「これはなにかね、地主の畑かね、農民たちのかね？」

「こつらは旦那方のでさあ」煙草に火をつけながら、パーヴェルが答えた。「で、あつつのほうが」うまく火のついたところで、煙を深く吸い込むと、しばらく間をおいてから、鞭の先で反対側を差し

て言った。「あつつが百姓たちのでさあ。やい、居眠りかよ?」彼は間断なく馬に声をかけ、機関士が圧力計をにらむように、馬の尾と尻のあたりにたえず流し目をくれていた。

けれど馬たちの走りぶりは、世のつねの馬たちとなんの変るところもない。轅なぐさにつけられた軸馬は、もちまえの一本気な気性そのまま、ひたむきに走りつづけるが、一方、副馬そくまのほうは、事情にうとい者には、長い首を白鳥のようにくねらせながら、駆けるにつれてしゃんしゃんと鳴る鈴の音を伴奏に、もっぱらがみ踊りをおどるしか能のない、札つきの怠け者に見える。

ニコライ叔父は、農地問題に関するヴォスコボイニコフの小冊子の校正刷りを持参するところだった。検閲の圧力が強まったので、出版社の側から手直しを要請することになったのだ。

「この郡じゃ、百姓たちが騒いでいるようだね」とニコライ叔父が話をつづけた。「パニコヴォ郷では商人が斬殺されたというし、地方事務所の種馬場が焼打ちにあったというじゃないか。おまえはどう思うね? 村じゃどんなふうに言っている?」

しかしパーヴェルの見方は、ヴォスコボイニコフの農業問題熱を鎮めようとかかっている検閲官にもまして悲観的だった。

「どんなふうに言っとるか? 締めつけをゆるめて、百姓を甘やかしたんだって言ってまさあ。わしら百姓をこんなふうに扱う気が知れねえ。百姓に自由を与えてみなされ、お互い首を締め合うことになるのがおちでさあ、ふんとの話。やい、居眠りかよ?」

* 一五七九年に夢のお告げでカザンで発見され、後にロシヤの守護に奇跡をあらわした聖母像を記念する祭で、旧暦七月八日、新暦七月二十一日にあたる。

叔父と甥の洞ヶ窪^{フウリヤンカ}行きはこれが二度目であった。もう道を覚え込んだつもりでいたユーラは、畑地の眺望が広く開けて、それが前から後から、細い紐のような森の縁どりに大きく包みこまれるそのたびに、いよいよ見覚えのあるあの場所に来たのではないかと胸をおどらせた。あそこから道は右に折れて、その曲り角のあたりからは、すぐまた視界を遮られてしまうのだけれど、十露里^{（二露里は、一キロ強）}にもわたってつづくコログリーヴォフ家の莊園が、はるかに白く輝く川のあたりまで、いや、川向うを走る鉄道線路のあたりまで、パノラマのように見渡されるはずだ。しかしユーラは何度となくあざむかれた。新たにまた一望の畑地がつづき、それがまたしても遠い森にかこまれるのだった。広々とした眺望のこのおもむろな移りかわりは、心のしらべをおのずとおおらかにした。思いきり夢を馳せ、未来のことを考えたかった。

後にニコライ叔父に名声をもたらした著書の数々は、まだ一冊も書かれていなかった。しかし彼の考えはすでに固まっていた。自分の時代がそんなにも間近に迫っていることを、彼は知らなかった。

ほどなく当時の論壇の代表者たち、大学教授、革命的哲学者たちの間に伍して、これはひときわ頭角をあらわすべき人物であった。だが、論ずるテーマこそ重なっていたが、用語法を別にすれば、この人物には彼らと共通なものなど何もなかった。猫も杓子もが何かのドグマにしがみついて、口先や見せかけだけに満足していたとき、ニコライ叔父は司祭でありながら、トルストイ主義や革命思想を越えて、さらに先へ進むことをやめなかった。彼が熱望していたのは、その具体性によって心を鼓舞するような思想であり、その展開の道すじがいつわりなく見定められて、この世の何かをよりよい方向へ変えることができる思想、それでいて幼児や無学者^{ムウチヤク}にも、稲妻や雷鳴のとどろきのようにはっきり

と目にはできる思想であつた。彼は新しいものを渴望していたのである。

ユーラは叔父といつしよだと楽しかった。叔父は母と同じように自由な人間であり、はじめて接するものに対してなんらの偏見をもたなかつた。母と同じく、生あるすべてのものは自分と対等だという貴族的な感覚^{*}を身につけていた。母がそうであつたように、彼もまたあらゆる事象をひと目で理解し、さまざまな考えを、それがはじめて頭にひらめいたそのまゝの形で、まだ生きており、意味を失つていない形のままで表現するすべを心得ていた。

叔父が洞ヶ窪^{ドワフヤンカ}行きに自分を同行させてくれたことが、ユーラにはうれしかった。そこはたいそう美しい土地で、その絵のような風光も、母を思い出させるよすがとなつた。母は自然を愛し、よくユーラを散歩にともなつてくれたものである。そればかりでなく、ヴォスコボイニコフに養育されてゐる古典^{ギムナジヤ}中学生のニーカ・ドウドロフとまた行き会えるのも、ユーラの楽しみであつた。二歳年長の彼は、きつとユーラを小馬鹿にしているにちがひなかつたが、握手をするとき、こちらの手をぐいと下に引くくらい頭を低くさげるので、髪の毛が額に落ちかかつて、顔の半分が見えなくなることが記憶に残つていた。

* ロシヤではすでにプーシキンに、「民衆の存在は貴族の存在と永遠の壁によつて隔てられていなかった」という言葉があり、この考え方はスラヴ派、ドストエフスキーにも受けつがれてゐた。この言葉は、そのようなロシヤ的伝統との関連で理解される。

* ラテン語、ギリシヤ語教育を中心にした高等中学校。十一・十二歳で入学し、予科一年、本科六年。卒業者は、実業学校生とちがつて、大学へ進むのがふつう。

「貧困の問題の真髄をなすものは」と、ニコライ叔父は手直しのすんだ原稿を読んでいった。

「そこは《本質》のほうがよくさうだね」とヴォスコボイニコフが口をはさみ、校正刷りに必要な訂正を書き込んだ。

二人は仄暗いガラス張りのテラスで仕事をつづけていた。ごたごたと転がっている如雨露や園芸用の道具類が目についた。こわれかかった椅子の背には防水ズックのカバーがかけてある。片隅には、泥のこびりついた沼沢地用の長靴が、胴をだらりと床に垂らした恰好で置かれている。

「しかしながら、出生・死亡統計の示すところによれば」とニコライ叔父が口述した。

「当年度における、と入れなければ」ヴォスコボイニコフがそう言つて、朱を入れた。

テラスにはかすかに隙間風が吹き込んだ。小冊子の原稿は、風で飛ばないように、花崗岩の塊で押えてある。

仕事が終わると、ニコライ叔父は早々にいとまを告げはじめた。

「雷雨になりそうなので、そろそろおいとましないと」

「とんでもない。返すものですか。ひとつお茶にしましょうや」

「晩までにはどうしても町へ戻らないといけないので」

「言いわけ無用。聞く耳もありませんな」

庭園のほうから流れてくるサモワールの炭火の臭いで、煙草とヘリオトロープの香りが消された。